

## 「仲安真康」への探求

アーロン・M・リオ（コロンビア大学）

「関東水墨画」というと、賢江祥啓とその弟子達や式部輝忠・雪村などの名が思い浮かぶだろう。中でも、二度上洛して関東画壇に大いに影響を及ぼした祥啓が、関東水墨画研究の主軸となってきた事は間違いない。字句の表層では、場所と技法のみを規定する「関東水墨画」という日本美術史用語の範囲は、主に祥啓の初上洛（文明10年・1478）から十六世紀の終りまでの関東画壇を指しており、それ以前とりわけ義堂周信らが康暦2年（1380）年に鎌倉を退去して以降の約百年間は、資料が乏しい事もあり、目立って日本美術史上の空隙となっている。

祥啓以前の鎌倉画壇において、僅かながら後世に名を残した唯一の画家として「仲安真康」という謎の人物がいる。十五世紀半ばに建長寺の塔頭西来庵に住んだ僧で、余技として水墨画を描いたと言われており、「康西堂」の呼称でも知られている。現存作品は伝承作を含めて20点ほどと比較的多く、祥啓以降の関東水墨画家に対する影響力も認められてきた。「関東水墨画の祖」とも呼ばれるが同時代史料を欠き、後世の画伝類では祥啓の前任者（時に祥啓の師）という以外、その伝の記述は紛然として統一を欠いている。

本発表では、まず「仲安真康」の伝記が如何に形成され、定着してきたかを確認する。江戸中期以降の画伝類に登場する「仲安真康」「康西堂」を追跡してみると、元々は別人と見なされていた事、初めて両者を同一人物と見なしたのが『古画備考』である事が分かる。この『古画備考』の強いインパクトのもとで幕末明治期に、以前の画伝類による様々な伝記情報を合成・アレンジし、さらに事実無根の資料を付け加えて、十五世紀半ばに活躍した、建長寺西来庵の僧「仲安真康」「康西堂」という画家の像が新たに作られたと主張したい。それ以来『古画備考』由来の伝記は、今日に至るまで反復され続けてきたが、実際には「仲安真康」という名前自体が誤りである可能性が高く、いま「仲安真康」に関して確信できる事は、ほとんどゼロに近いと言えるだろう。

この認識の上で本発表の後半では、現存作品を整理しながら、この画家の基準作を新たに提唱する。「鳩図」（正木美術館蔵）、「富嶽図」（根津美術館蔵）、「虎溪三笑図」（細見美術館蔵）の三点を中心に、これまで等閑視されてきたその独特の様式を改めて論じてみたい。線の最小限の使用、空間の奥行きと三次元性の無さ、そして描写のぎこちなさなどをその主な様式的特徴と見れば、恐らく最も知られている「仲安真康」の現存作品の二点、「山水人物図」（東京国立博物館蔵）と「白衣観音陶淵明李白図」（ドラッカーコレクション蔵）は否定せざるを得ない。以上の分析結果を踏まえ、最後に「仲安真康」を祥啓直前の画家でなく、より早い十五世紀前半に位置づけ、初期鎌倉画壇と所謂「関東水墨画」との架け橋として提示したい。